

大和田 新さん(ラジオ福島 チーフアナウンサー)

彩 発見

「東日本・津波・原発大震災」で被災した障害者の記録映画「生命(いのち)のことづけ」が完成し各地で上映されている。副題は「死亡率2倍・障害のある人たちの3・11」。この映画は、障害者の死亡率が一般住民の2倍以上であるとの事実を踏まえ、被災した障害者や、関係者の証言を基に製作された。監督で耳が不自由な早瀬憲太郎さん(39)は「あと少しの支援があれば」と悔やむ。この映画のプロデューサーを務めた友人の、NPO法人CS障害者放送統一機構の梅田ひろ子さんからの依頼で私がナレーションを担当した。

収録前に送られてきた原稿を、移動中の新幹線の中で初めて読んだ。あまりにもひどい現実、涙が止まらなかった。気持ちが高ぶったまま、新宿のスタジオに入った。映像に合わせて原稿を読む。案の定、梅田さんからダメだしが

東日本大震災 障害者の記録映画



TOUJOKU SAHAKKEN

救えた命もあつたはず

入る。「もっと気持ちを抑えて！」冒頭は、宮城県気仙沼市鹿折の永沼千尋君(当時小学2年)の笑顔の写真。鹿折地区は津波と火災に襲われた。千尋君は、いつも目の見えない両親を気遣う優しい子だった。その日千尋君は、岩手県陸前高田市から遊びに来ていた大好きなおばあちゃんとお母さんの手を引きながら、逃げ惑ううちに津波にのまれたという。

津波や火災からようやく逃れた障害者を待ち受けていたのはさら

に過酷な日々だった。避難所で心肉が萎縮する筋ジストロフィーのない言葉を浴びせられた人、「迷惑をかけるから」と避難所に行かず車の中で2週間も過ごした人もいた。「精神障害者はなかなか世間の理解が得られていない。罵声や言葉を浴びせられたり、蹴られたりした人もいた。普段からの理解と協力が何よりも大切」と宮城県精神障がい者家族連合会会長の笠神勝雄さんは、悔しそうに振り返る。

福島県いわき市久之浜の佐藤真亮さん(当時35歳)は、全身の筋

0・04。新聞の見出しくらいはとか見える。耳は、話し声を聞いて認識するが、言葉としては取れない。筆談か簡単な手話。コミュニケーションを取っている。2011・3・11、早坂さん、仙台駅で被災した。通訳介助者一緒だったため、安全な場所へ導いてもらい、その後、6キロのりを介助者と2時間歩いて帰した。自宅は半壊していた。

映画の最後に早坂さんは言う。「今回の災害で明らかになった書者を取り巻く問題は以前から摘み取っていた。日ごろからのさまざまなつながりがあれば、救え命もあつたはず。私は障害者を持って生まれたが、障害があってもくても、一度限りの人生、夢をしながら、楽しく生きていきたい。障害があるからといって、決して命を諦めたくない」

おおた 神奈川 川原須賀市出身。1977年ラジオ福島入社。編成局専任局長・チーフアナウンサー。納豆と豆腐が大好きで、阪神タイガースをこよなく愛する。趣味はチャンネル全般とギヤルズウォッチング。「大和田新のラヂオ長屋」「月曜Monday(もんだい)夜はこれから」などを担当している。

「生命のことづけ」は音声解と手話、字幕付き。講演会の合にも見られるように時間は37分おさえた。ブルーレイディスク自主上映会用に上映機付きで1円で近日販売予定。問い合わせは日本障害フォーラム(03・5922・7628)。